

屋久島世界遺産地域管理計画の基本方針に盛り込む事項について

1. 基本方針策定の考え方

- 現行の屋久島世界遺産地域管理計画では、管理の基本方針については、「3 管理の枠組み」の「(1) 基本的な考え方」及び「4 管理の方策」の「(1) 基本方針」に記載されている。
- 新たな基本方針においては、遺産地域の原生的な自然環境を後世に引き継ぐとともに、世界遺産としての価値を将来にわたって維持していくことを目標とし、厳正な保護を図ることに加え、現在取組を進めているヤクシカ対策や著名木の樹勢回復など能動的な管理を行うこと盛り込むとともに、管理を行うにあたっては科学的知見を踏まえて順応的に行うことを記述する。
- 特に、その価値を維持、管理するため世界遺産委員会で評価されているクライテリアの記述を追加する。
- 管理を行う際に踏まえる視点として、「地域との連携・協働」、「順応的管理」、「利用と自然環境の保全の両立」、「地球レベルでの調査研究・モニタリング」、「広域的な視点による管理」、「森林との関わりの歴史を踏まえた管理」を記述する。
- 「地域との連携・協働」には、関係行政機関は「屋久島世界遺産地域連絡会議」により相互に連携を図るとともに、屋久島山岳部利用対策協議会や屋久島町エコツーリズム推進協議会等様々な機会を活用して、地域住民や関係団体からの意見や提案を幅広く聴く旨を記述する。
- 「順応的管理」では、世界遺産として価値が維持されているか、損なわれているかを把握するため、関係機関及び団体が連携して継続的にモニタリングを実施し、科学委員会の助言を得つつ、モニタリング方法や管理方策を柔軟に見直す旨を記述する。
- 「利用と自然環境の保全の両立」では、一部地域への入込み者数の増大による遺産地域の自然環境に与える影響が懸念されることから、利用のコントロールなどを含む「エコツーリズム」の推進を図ることとし、それに応じた施設整備を適切に行う旨を記載する。
- 「地球レベルの調査研究・モニタリング」では、『気候変動による世界遺産への影響に関する施策文書』において、「世界遺産地域は、モニタリング、緩和

及び適応の対策を実施し、試験し、改善する実験場としての機能を果たすとともに、このような象徴的な地域での活動は注目を集めることから、結果として他地域の管理改善に大きな影響を与えうる」とされていることを踏まえ、垂直分布を有する屋久島は地球レベルでの調査研究・モニタリングフィールドとしても貴重な存在であるとの視点に立ち、関係行政機関は各種研究機関とも連携・協力して効果的な調査研究・モニタリングを実施する旨を記述する。

- 「広域的な視点による管理」には、遺産地域の生態系と共通性や連続性を有する遺産地域の隣接地域も視野に入れて管理を行うことと、「人間と生物圏（MAB）計画」も踏まえて管理を行うことを記述する。
- 「森林との関わりの歴史を踏まえた管理」では、管理にあたっては、屋久島の森林は江戸時代の藩政あるいはそれ以前から行われてきた伐採の影響を受けつつ成立していることを記述する。

2. 基本方針（構成案）

（1） 管理の目標

屋久島は、温暖な黒潮の中に屹立する2000m級の山岳を有する島で、遺産地域は、世界的に特異な樹齢数千年のヤクスギをはじめ、多くの固有種や絶滅のおそれのある動植物などを含む生物相を有するとともに、海岸部から亜高山帯に及ぶ植生の典型的な垂直分布がみられるなど、特異な生態系とすぐれた自然景観を有している地域である。

遺産地域の管理に当たっては、これらの原生的な自然環境を後世に引き継いでいくとともに、以下に掲げる世界遺産としての価値を将来にわたって維持していくことを目標に、各種制度に基づき厳正な保護を図るとともに、必要に応じて能動的な管理を行うこととする。

○クライテリア（vii）

他に類を見ない日本スギの優占する良好な生態系を有する。

○クライテリア（ix）

温帯地域原生林という特異な遺構が存在し、この森林帯は海岸線に沿った広葉樹林、これに続く温帯針葉樹林、さらに中央部の冷帯のササ原まで広がっている。

自然科学の各分野の研究－生物進化論、生物地理学、植生遷移、低地と高地の生態系の相互関係、陸水学、温帯地域の生態系の変異等－を行う上で非常に重要である。

（2） 管理に当たって必要な視点

ア. 地域との連携・協働

イ. 順応的管理

ウ. 利用と自然環境の保全の両立

エ. 地球レベルでの調査研究・モニタリング

オ. 広域的な視点による管理

カ. 森林との関わりの歴史を踏まえた管理